赤旗記者「特別募集」

すいよう特集

「新聞の危機」「ジャーナリズムの衰退」が言われるなか、日本共産党が発行する「しんぶん赤旗」が元気です。

権力の監視と真実の報道を貫き、「戦争の準備ではなく平和の準備を」と理性の論陣を張る、世界と日本の草の根のたたかいを伝える―こんなかけがえのない役割をはたしているのが「赤旗」です。

引き続き、もっと大きな役割をはたしていきたい、多彩で役に立ち、ためになる、勇気を運ぶ紙面づくりにつとめたい。そのために赤旗編集局はいま、編集局で働く仲間を大募集中です。政治を変え、社会を変え、未来をつくる―記者たちの思いと編集局の一端を紹介します。

しんぶん赤旗をあなたも一緒につくりませんか

未来切り開く報道　あなたの手で

たたかう人世界中に

ワシントン特派員　石黒 みずほ
2019年入局

「世界中どこに行っても、たたかう人たちが必ずいる。その人たちの声を届ける記者になってほしい」―。先輩記者の言葉を胸に、米国で日々取材に取り組んでいます。

ストライキへの支持を呼びかける署名を集めていた活動家は「私たちはみんな労働者。一人ひとりの経験に結び付けた対話を続けていくことが大切だ」と語りました。

特派員は、自主的な判断が求められたり、勇気を振り絞って現場に飛び込むこともあって大変です。でも、変革を求め、あきらめずたたかう人々の姿を、記事を通じて伝えることができる。特派員として何よりのやりがいです。

「誰も取り残さない社会」を実現したい―。共産党員、赤旗記者としての私の原点です。社会を変えたいという日本の皆さんを勇気づけられるような記事を書くため、力を尽くしていきたいです。

読者の命救うことも

日曜版編集部　藤川 良太
2003年入局

「これでゆっくり休める。ホッとした」。その夜、病室のベッドで重度の結核を患う夫は妻に言いました。社会保障制度を詳しく解説する日曜版の人気連載「お役立ちトク報」の記事の一コマです。

夫婦は病気で仕事を失いながら神奈川県内のアパートを追われ、路上生活に。持ち出せた荷物の中に親族からの手紙があり、無料低額診療制度を特集した「お役立ちトク報」が同封されていました。最後に頼ったのが同制度で、命すら危なかった夫婦を助けました。

記事を書いてよかったと心底思いました。

核攻撃の危険すら想定した全国の自衛隊基地の強靱（きょうじん）化計画があります。強靱化は基地のみで、核攻撃の影響があるはずの周辺に住む人たちに計画はまったく知らされていません。

権力が情報を隠蔽（いんぺい）し、自らに都合がいいものばかりを宣伝する現在にジャーナリズムの重要性は増しています。

小さな声をつなげて

社会部　小林 圭子
2021年入局

前職は保育士をしていました。「子どもたちが笑顔で、安心して成長できる環境をつくりたい」―その思いは、記者になった今も変わらない大きな柱になっています。

所属する社会部では、教育や社会福祉、災害や原発問題など幅広い分野を取材します。現場に足を運び、当事者の生の声を聞く。個々の問題はさまざまでも、原因の根っこはつながっていると改めて実感します。

赤旗記者の魅力は、草の根で頑張る人たちに寄り添い、権力に消されてしまいそうな小さな声をすくい上げていることだと感じます。

子どもたちが安心できる環境は誰にとっても安心できる社会であるはずです。報道には「社会をよくしたい」という一人ひとりの思いをつなげ、大きな動きに変えていく力があると信じています。次の世代により良い未来を渡せるように一緒にがんばりましょう！

▲赤旗記者「特別募集」特設サイトはこちらから

国民の目線で取材、紙面づくり

赤旗編集局には23の部署があります。

■政治部	■地方部	■校閲部
■社会部	■党活動部	■整理部
■国民運動部	■学術・文化部	■工程管理・開発部
■外信部	■くらし家庭部	■電子版室
■論説委員会	■テレビ・ラジオ部	■総務部
■特報チーム	■囲碁将棋行楽部	■広告部
■経済部	■写真部	■日曜版編集部
■スポーツ部	■読者室	

レイアウト・下渕雅史